

グローバル化時代に求められるもの

堀田 健介



いま、われわれが直面しているグローバル化は、世界が単純に一面化・一体化していくのではなく、National、International、Global な関心が複雑に絡み合っ、かつ驚くべき「スピード・広がり・深さ」で進行している。しかも、この現象は「雨」のようなもので、慈雨となることもあれば豪雨となることもある。この雨に、国のレベルでも個人のレベルでも自らを見失うことなく対処すべき視点を、どのように求めるべきであろうか。

明治は文明開化という春霖を浴びた時代である。ときの思想家・中江兆民は、酒席にコスモポリタニズムを代表する「洋学紳士」と国粋思想を代表する「豪傑君」を登場させ、この二人に日本の「近代化」について激論をさせた(「三酔人経綸問答」)。その議論は別にして、この二人が100余年経って「グローバル化」で揺れる現代日本を見たらどんな議論をするだろうか……。その酔夢譚から抜粋すれば、次のようになるかもしれない。

洋学紳士「100年も経つと日本も変わりましたな。しかし、まだまだ不十分。規制のない市場経済、デモクラシー、個人主義社会へは道半ばです。閉鎖的集団主義社会のムラ意識も残っている。これだけグローバル化が進んだのだから、「ひと」「もの」「かね」の出入りを完全に自由にし、世界基準に則った仕組みを作らないと日本は相手にされませんぞ。当面苦しいが、私情を排して日本のローカルルールは根絶すべきです。」

豪傑君「相変わらずの西洋崇拜主義だ。『国柄』をもっと大事にしなければいけない。我が国の存在価値は、財布が重くて頼りにされるほどの軽さでしかない。金融自由化や国際統一会計基準の導入などは国民経済を混乱させ、民主主義も人気取りの衆愚政治で進化どころか退化した。個人主義も「自分勝手」

と同意語で、公德心は何処へ行ったのか。最近金融危機だ、テロだ、凶悪犯罪の増加だ、SARS(重症急性呼吸器症候群)だと碌なことはない。日本の独自性を守るためには、教育のやり直しと国防力の大胆な増強も必要だ。」

ここで三人目の酔人、南海先生が二人の間に割って入って曰く、「二人とも大分酔いがまわりましたな。だが、日本が100年前と同じような転換期にあるのは確かだ。では、どう対処するか。具体的葛藤を処理するときに、座標軸を何処に置くかが大切だ。戦争・紛争ばかり、政治・社会・経済ばかり、あるいは人間ばかり。歴史から育まれた知恵と良識だけが、自己の抱える葛藤を正しく判断・処理できる。重要なのは「時」と「場所」を考慮に入れて理想と現実との「平衡」を如何に図るかにある。良識が支えるこの平衡が崩れると、合理が単なる打算になり、信仰が狂信になり、感情が衝動になり、懐疑が虚無となる。平衡とは退屈どころかダイナミックで、大変緊張感のあるものだ。振り子の針は、振れ過ぎると必ず反対に大きく振れ返す。平衡こそが健全なる現実主義だ。それにしても、判断力と勇気のあるリーダーが必要だな。」

渥美国際交流奨学財団が支援している優秀な留学生は、将来その国のリーダーとなるべき人達である。日本の文化・価値体系と触れ合う中で、自分たちが大切にしているものは何かを考え、自らの座標軸を作り上げていくことによって、自分の国に、そして世界に貢献しようという意志が育まれる。様々な視座を学び、歴史感覚を養って理想と現実を実際に平衡させるといった人間のドラマを演じることになるのだろう。ドラマツルギー(演劇的構成)を自ら作り上げるのは、「南海先生」でなくても退屈どころかダイナミックで素晴らしいことだと言いたい。
(モルガン・スタンレー・ジャパン・リミテッド会長)